

## 新刊 紹介

"... the difference between a college man and a man lacking in college is that he has the resource of books, that he knows there's a book side to every-thing."

古屋大学助教授を経て現在文部省教科書調査官。同志社と直接関係はないが、親族に同志社大工学部出身の渡辺鐵男氏がある。著者の序文にも、

：従来の新島伝の多くに見られるような、日本精神主義者の立場や、偉大な教育者というような一面的なとらえ方を排し、つとめて新島の事業全般を、時代の推移によってとらえ……

とあるように、著者は新島先生の自由教育の日本に対する使命に深い関心を寄せて既刊新島伝と関係文献を渉猟のところ、絶版のデヴィス博士によるもの以外は殆んど私版本に近いものが多くて一般に流布せず、日本の教育界のこの重要人物の伝記が全国に普及していないのを惜しみ、先ず既刊諸文献を資料として先生の生涯の重要な峰々を年次順にたどり、新島襄伝の普及を目的としてこれを纏められたのが本書である。

通巻して同志社に対し極めて深い好意を寄せながら旦々と筆が進められている。

新島先生に関する記載以外の史実については一、二検討を要すると思われるが、新島先生に関しては現段階では二、三の誤植

を除いて強いて訂正すべきところは見出せない。広く学生諸君に参考書としてすすめたい。

初版にあった誤とは、既刊諸文献の誤をそのまま引用されたため生じたもので著者にはまことにお気の毒であった。この改版が広く普及して既刊諸文献の誤をも覆い尽す日の近からんことを祈る。(田中)

BRASCH/SENZOKU „DIE KALLIGRAPHISCHE KUNST JAPANS“ 東京・日独協会 B5判グラビア一〇六頁、本文九八頁。

最近、欧米に日本ブームが起り、青い目の日本研究家がふえているが、著者の一人クルト・ブラツシュ氏は戦前から日本文化の研究家である。さきに「禪画」を發行(本誌一号参照)それによって、昨年末、同志社大学から文学博士の学位を贈られた。

本書は欧米に日本の書道を紹介するため書かれたものであるが、すぐれた「書」を見ることが興行きの深い日本文化を理解する最短コースだという著者の意図にもとづいて叙述が進められている。従って、本書では飛鳥時代の「千字文」の輸入から現代

渡辺実著「新島 襄」 東京・吉川弘文館

新書判二九七頁、定価三〇〇円。

この本は地歴書の刊行で名の通った東京本郷の吉川弘文館發行人物叢書第三十五篇で、昭和三十四年十月刊行初版の改訂再版である。初版には誤植、固有名詞と史実の相違、表現に妥当を欠くもの等合計六十余カ所の問題点があったが、再版でこれらが全部忠実に修正されたのは同慶のいたりである。

著者は東京高師、日大史学科の出身、名

のアブストラクト書道までを各時代ごとに取り上げているが、日本人でも「好み」によってその評価がまちまちであるうえ、日本の文字になじみのない外国人に「書」を理解させることは極めて困難であり、著者もその点に苦心している。グラフィア写真や挿画が多いのはそうしたことからであろう。

本書は十二章から成り立っている。まず第一章で文字のなりたち、文房具とその使用法、書の六体等を図解入りで説明し、書道についての基本的知識を与えている。第二章以下が本論というべきもので書道の文化史的概観を与えている。本来、意志伝達的手段であり、記録保存、装飾的役割しか果していなかった「書」が芸術へと昇華するのは「床の間」の作られた十五世紀の東山時代以降であり、第二次世界大戦後、はじめ、芸術として独自の地位を占めるようになると著者は主張している。

また「書」の変遷とともに、いわゆる「能書家」も公家や僧侶から武士、学者、更に書道家へうつりかわることにもふれている。本書のように書道を文化史学の立場から取り上げたものはきわめて少く、それが

正しく外国に紹介されることは喜ばしいことである。

なお、人名や用語はローマ字と日本語を併記し、簡単な解説を加えているので理解しやすく、親切である。

ラインホルド・ニーバー者、オーテス・ケリー訳『自我と歴史の対話』The Self and the Dramas of History

東京・未来社、A5版三一四頁、定価八五〇円。

この書は、ケリーさんが、若手の研究者のグループと共に、長い年月をかけて訳されたもので、十年前に出た『アメリカ史の皮肉』につぐ第二の訳業である。青と白に色分けられたカバーの、落ちついた親しみやすい書物である。

ニーバーの書物の翻訳も既に七冊ばかり出ているが、この「自我と歴史の対話」は、ここ十年間におけるニーバーの代表作の一つである。訳文は章によつては少し難解なところもあるが、とかく批評の多かった今までのニーバーの翻訳に比して、はるかに明解であり、一応の出来ばえであると言え

よう。又補章としてニーバーの自伝が収録されていることも読者には親切である。

今日の時代が、「疎外」の時代だとか、人間を非人格化する時代とかは、よく言われることであるが、それだけに、人間の本当の姿、つまり「自我」が何であるのかが、現代の哲学、心理学、社会思想等の分野で改めて問題にされ始めている。そしてニーバーのこの書物も、正に現代のこの様な問に一つの答を与えたものだと言えるであろう。

ニーバーはこの書物で、ヘブライズム乃至はキリスト教が、人間理解に与えた貢献を、それが「自我」を自己自身、他者、共同体、歴史と対話する「対話的」存在として扱えた点に見る。そして、自我と社会、自我と歴史の対話が、どの様にドラマとしての歴史を展開して来たかを明らかにしてくれる。そしてまた、この様な「対話的」な見方が、現代においてもなお、否現代においてこそ尚一層、とかく一面的になりがちな、人間、社会、歴史の全体的、動的理解にとって如何に必要かを教えてくれるのである。

国分綾子(文) 浜辺喜代治(写真) 著「カメ  
ラ 京味百選」京都淡交新社、新書刊二三  
九頁、三〇〇円。

有名無名にかかわらず、これこそほんと  
に京の味と言える料理、菓子百八を写真入  
りで解説したもので、昭和三十四年に出た  
絵入り京百味よりも一段と内容が充実し、  
写真も対象によりそれぞれ変った角度から  
みごととならえ方をしている。解説者国分  
綾子夫人は昔の同志社新聞(時報六号能勢  
克男氏の稿参照)の綿引綾子、現在夕刊京  
都新聞編集局付部長。味覚は無論のこと材  
料の出所、同類の比較、特色、それぞれの  
向きと平素の愛好階層、季感、伝統的なも  
のは沿革にまでおよび、長年文化欄担当で  
練られた解説は読みよい。見る本としても  
読む本としても上乘であり、見返しには地  
図、巻末に料理、菓子の価値も示され、懷  
具合を計って食べ歩きをしたり入洛客を案  
内するには絶好の参考書である。なおあと  
がきによると取材には淡交新社の校友伊藤  
高勝氏の大きな協力があつたことがわか  
る。(R・T)

大島みち子著「若きいのちの日記」 東京・  
大和書房、B 6判二二八頁、定価二四〇円  
死に直面した人間の言葉というものは人  
の心を打つものである。とくに、本人が一  
歩一歩死の近づくことを意識する場合、激  
しい生への執着、あきらめ、あこがれ等が  
こもこも現われる。この日記もそういう性  
質のものである。既に週刊誌にも紹介され  
たので、ご存知の読者もあろう。著者は同  
志社大学文学部在学中、数年に亘る闘病生  
活のち昨年八月永眠した。病名は「軟骨  
肉腫」——ガンによく似た病気である。本  
書は昭和三十七年七月から、死ぬひと月前  
までの日記抄である。著者にはこのほか、  
友人である河野実君(中央大学在学中)と  
の間に交した書簡集「愛と死をみつめて」  
もあり、本書と同じ出版社から出されてい  
るが、日記には両親や友人にもいえなかつ  
た苦悩や闘病記録が綴られ、哀れをさそ  
う。

なお、巻末に両親、河野実君の思い出や  
主治医の金光正志氏の解説が載せられてい  
る。

いつみ同人著「句集 干瀉」京都・一条淨福  
寺東・那須方、辨形本一五三頁、非売。  
派閥と因縁情実のからんだいわゆる俳壇

というものに所属しない京都の俳句同好者  
十九人の、合同年刊句集で、本集は第八冊  
目。こんなに続刊の例は全国的に珍らしい  
由。同人は報道関係者、医師、会社役員、  
工芸作家、画家、公務員、学校教職員、主  
婦らで、年間の作句中から三十句を自選し  
指導者那須乙郎の句を加えている。乙郎は  
馬酔木同人、同志社女子高・化学の教諭、  
同人中同志社関係者は松岡英士(商高 永  
田葦水(校友) 田中良一(本部)の三名、  
学生の父兄は五人を教え、既して高年者で  
落着いた境涯で静かに自然と交っている。  
乙部の句は入院中の吟で、病室に心頭を澄  
ませ巧みな表現で日々その感懷を序べた佳  
句に満ちている。田中良一の内海干瀉風景  
の口絵を添えている。非売で入手が困難で  
あるが大学図書館は第一冊以降全巻を蔵架  
している。